

## 奇数と偶数

高橋 弥守彦

### Odd Versus Even Numbers

TAKAHASHI Yasuhiko

#### 内容提要

众所周知，日本人之所以喜欢奇数，是因为奇数无法分成整数；而中国人偏爱偶数，是源于世界由天和地、男和女、上和下、左和右等成双成对的东西组成。

中国和日本都有道教、儒教、佛教，日本现在仍有很多神社、佛阁等，可见这三种教对我们的精神世界产生的影响之大。中日两国人民对数字文化的差异，亦与道教、儒教、佛教有着很深的联系，甚至影响到我们现代人的精神生活。本文以体现在语言世界的例子来进一步验证这一有趣的现象。

【キーワード】 三教 吉凶 同音 自然環境 数字文化

#### 目次

1. はじめに
2. 中国の「偶数」思想
3. 日本の「奇数」思想
4. 数字文化の由来と現代
5. おわりに

## 1. はじめに

中日両言語では数字に対して、視点の当て方が違う場合がある。たとえば、旅行では中国語は“两日游”と表現するが、日本語では「一泊二日」と表現する。前者は実働時間の昼間に視点があり、後者は休息時間の宿泊数と実働時間に視点が当てられているが、どちらかというとも休息時間の宿泊数に視点が置かれている。それは、日本人なら誰もが知っているように、宿泊したホテルには必ず泊まり、一般には朝早くか、遅くとも午前中にはチェックアウトするが、昼間の活動はしばしば予定通りにいかないからである。

中日両言語のこれらの表現はどちらも正しいが、一応フロントで日程の確認を取るほうがよい。かなり日本語のできる中国人であっても、このような問題を起こす可能性がある。日本人も然りである。旅行だけでなく、仕事についても同様である。中国語では“五天工作制”と言うが、日本語では「週休2日制」と言う。中国語は実働時間に視点が当てられ、日本語は休息時間に視点が当てられている。これらと類似した表現に買物の割引表示がある。中国語ではよく“打九折”[9掛け]と言うが、日本語では「3割引」「打七折」と言う。日本語は、以前は「7掛け」とも言っていたが、今ではほとんど見かけないし聞かれない。割引表示でも中国語は実際に支払う金額に視点が当てられ、日本語は割引される金額に視点が当てられている。

上掲の「旅行」「仕事」「買物」三者に共通することは、中国語は実際に活動する日数と実際に支払う金額であるのに対し、日本語は休息を意味する宿泊数と割引される金額である。この点から、日常生活では、中国語は実質に視点があり、日本語は非実質に視点がある、と言える。

数詞は具体的な意味“差一块钱。”[一元足りない]や「10円足りない。」“少十块日元。”と抽象的な意味“请允许我代表各位来宾说几句话。”[高い席から一言申し上げますことをお許してください。]や「まあ座って、二人で一杯飲もうや。」“坐下，咱俩喝两杯。”を表す。これはことわざや成語のなかに用いられる数詞も同様だが、どちらかというとも抽象的な意味を表す場合に多く用いられ、そこに中日両言語の特徴が表れる。

中国人が偶数を好み、日本人が奇数を好む数字文化<sup>1)</sup>は、中日両国の自然環境と哲学とに裏付けられるが、それは中日両国の環境に支配され長い年月の間に培われたものであり、一朝一夕でできるものではない。数詞については、一般的な言語表現から見れば、中国人は「対」を表す偶数を重んじる傾向にあり、日本人は「非対」を表す奇数を重んじる傾向にある。なぜ中国人と日本人とでは同じ東アジアに住んでいながら、重んじる数詞が違うのであろうか。

本稿では先行研究の分析と現実の世界における言語事実にスポットをあてて、中日両国における数字文化の傾向を分析してみよう。特に「吉凶」を表す場合、この傾向が顕著なようなので、本稿では「吉凶」にポイントをあてて、この傾向を検討してみる。

## 2. 中国の「偶数」思想

日本にある大きな中華料理店に行くと、店の規模によって丸テーブルの数は異なるが、一般に丸テーブルは偶数、各テーブルの椅子も4脚（板橋区西台の『王華』）である。中国でお宅に招待されたり、レストランで接待されたりすると、皿数は4枚、お碗は2つ、あるいは皿を使う偶数の料理やコップを使う偶数の飲物などが出てくる。結婚式となると、偶数の日、偶数の円卓、偶数の料理、偶数の引き出物、偶数の出し物である。これらには“双喜”[二重の慶事、喜びが重なってくる]という願いが込められている。また、映画やテレビでみる中国人の結婚式では“双喜”や“花鸟”の切り絵がよく壁に貼られている。

中国では「4」が基本で、丸テーブルの大きさにもよるが、4または偶数によってバランスを取り調和を求める思想（“四平八穩”）があるようである。これが中国人の基本的な考え方なのだろう。これはたぶん自然界の“东南西北”や“春夏秋冬”などの4項目に由来し、4項目によってバランスを

<sup>1)</sup> 汪玉林（2002）、西山豊（2014）などに数字文化の概念が見える。

取り調和や円満を表すと考える思想（“三缺一、缺一不可”）があるからだろう。過日、テレビの朝の番組で中国人観光客の爆買ツアーの特集（羽鳥慎一モーニングショー：2016年2月23日〔火〕）を放送していた。観光客が帰国をすると、友人への贈り物も偶数であった。そういえば、ある時、中国の友人からお土産をいただいた。大きな紙袋に入っていたので、帰宅してから数えてみると偶数（“四色礼”）であった。

ある時、日本の五つ星ホテルで中国人の結婚式が行われ招待された。豪華な食事と飲物、琴と胡弓の生演奏の音楽、横浜中華街の2匹の獅子による獅子舞があった。美味しい食べ物と飲物、生の演奏と演技、このほかにも結婚式を挙げるお二人の誕生から現在までの簡単なプロフィールを大画面の映写で紹介した。これらはすべてが偶数であった。伝統的な数の文化と新しいアイデアに基づいて行われた結婚式は、もちろん盛大であり盛り上がった。あとで配られたテーブルの配置と料理のメニューを見てみると、円卓は12卓、料理は12品であった。

中国語の偶数は一般に吉祥の意味を表し、普段の生活のなかにもよく偶数が出てくる。中国民族が偶数を好む傾向は、生活のなかだけではなく、中国の言葉の粹である成語や四字熟語のなかにも表れている。ここからは四字一句のリズムが生まれてくる。

- ①父母双全：両親ともに健在
- ②双喜临门：めでたいことが重なる
- ③四海波静：天下泰平
- ④四海兄弟：世の中の人みな兄弟
- ⑤四海为家：天下のどこでもわが家とすることができる
- ⑥文采四溢：文章や言葉が優美
- ⑦六六大顺：すべてが順調
- ⑧八仙过海：それぞれが能力や特技を発揮する
- ⑨八字为开：单刀直入で隠し事がない
- ⑩十全十美：非の打ちどころのない完璧さ

一般に偶数は吉祥の意味を表す場合に使用されることが多いが、偶数は悪い意味を表す成語“胡说八道”[口から出まかせを言う。ウソ八百を並べ立てる]、“八面玲珑”[誰に対しても人当たりがよい。八方美人]の中にも用いられている。これらは一般の原則から外れている成語である。“胡说八道”は悪い意味を表しているが、これは悪い意味を表すために、良い意味を表す語句“八道”を否定する語句“胡说”を用いることによって、悪い意味を強調している。“八面玲珑”は対人関係ですべての方面で上手くいくことはありえないので、否定の語句を使わずに肯定形により意味全体を否定する用法である。但し、人当たりのよいプラスイメージで使われる場合もある。

中国民族は偶数を好む傾向にある。その中でも“二”と“十”が特に好まれるようである。“二”は“好事成双”のように、良いことは対になるという思想である。これは自然界の「男と女」「左と右」「昼と夜」「天と地」などが対でできているという考え方から来ているのであろう。対は一つのまとまりであり、万物は対になっているという思想である。“十”は“実”と音通で、日常生活や仕事での完璧や円満を表す。

中国民族は一般に偶数を好み、対を好む傾向にある。偶数は一方が欠けては偶数にならず、双方がそろってこそ偶数である。偶数は分割すれば偶数でなくなるので、中国民族の思想のなかには、偶数は情理に合う対、生まれながらの対、運命的な対、分割できない対などがあり、ヒトやモノの対などは“対”（“天生一对”[理想的なカップル]）や“双”（“文武双全”[文武両道]）などで現す。

偶数で示す一方は他方があってこそその対であり、それによって均衡・調和がとれ、そこから完全・円満が生じ、吉祥の象徴<sup>2)</sup>となったのであろう。しかし、奇数も以下のように成語や諺の中などに現れる。ここには偶数を用い

<sup>2)</sup>《千字文》は南北朝時代の梁朝（502年～557年）に編纂され、四字一句で250句あるので、《千字文》と言われている。《百家姓》は宋代（960年～1279年）に編纂され、504の中国人の苗字が紹介されている。これらの本はいずれも四字一句で書かれているので、四字一句のリズムがある。

ていないが、四字一句のリズム (⑪⑫⑬) と、対のリズム (⑭⑮)<sup>3)</sup>が残る。

⑪三陽开泰：春が来て万物の精気が満ち溢れるさま

⑫三元及第：郷試・会試・殿試の試験にすべて主席で合格すること

⑬三足鼎立：鼎の足が3本であることから、三勢力が並び立つこと

⑭三个臭皮匠，顶个诸葛亮。：三人寄れば文殊の知恵

⑮麻雀虽小，五脏俱全。：規模は小さいが必要なものはそろっている

このほか、“三”に関連する諺などに“三十六策，走为上策”[三十六計逃げるにしかず]、“地煞七十二变”[孫悟空の72変化]、“三百六十行，行行出状元”[さまざまな職業があるが、どの職業でもトップがある]などがある。これ以外に、奇数の“三”は葬式のときであれば、一般に三枚の皿・三組の箸・三杯の酒を用意する。

《論語》や《老子》のなかには、以下の文に見られるように奇数も偶数も現れる。これらの数字の用法からすると、数字はさほど「吉祥」とは関係がないようである。

(1) 子曰，三人行必有我师焉。择其善者而从之，其不善者而改之。

(『論語』「学而第一」)

子曰く、三人ゆけば必ず我が師あり。其の善なる者を選びて之に従い、其の不善なる者はこれを改む。

(2) 子以四教，文行忠信。

(『論語』「学而第一」)

子は四をもって教う、文行忠信なり。

(3) 五色令人目盲，五音令人耳聋，五味令口爽。(『老子』「第十二章」)

五色は人の目をして盲せしめ、五音は人の耳をして聾せしめ、五味は人の口をして爽せしむ。

(4) 豫兮若冬涉川，犹兮若畏四邻。

(『老子』「第十五章」)

豫として冬に川を渉るがごとく、猶として四隣を畏かるがごとし。

<sup>3)</sup> 諺はよく五字一句で対となっている場合が多いが、諺は意味が重要視されるので、そうではない場合も多々ある。

## 2.1. 中国の「対称」（対）表現

中国人は偶数を好むが、特にその中でも「対称」（対）が好きなようだ。一年に一回、旧正月に換える「聯」も対なので「対聯」という。また、日本でも結婚式のときによく使われる《長恨歌》の中の対句“在天愿作比翼鸟，在地愿为连理枝。”[天にあり願わくは比翼の鳥とならん、地にあり願わくは連理の枝とならん。]は特に有名だ。

一般的に言えば、中国の書道や絵画は全体のバランスを重要視している。日本はおもしろいことにアンバランスを重要視している。中国の書道の中には書と絵が合体しバランスを取っている作品がある。日本では、書は書、絵は絵であり、両者が合体した作品は筆者の知る限りではほとんど無い。中国で最も古いとされている文学作品の精華《詩經》や中国民族の言葉の精華である漢詩（絶句 [四句]、律詩 [八句]）や宋词などは、対句を好んで用いるようである。ここには、やはり四字一句<sup>4)</sup>と対のリズム<sup>5)</sup>が活かされている。

- (5) 关关雎鸠 在河之洲 窈窕淑女 君子好逑 参差荇菜 左右流之  
窈窕淑女 寤寐求之 (『詩經』「関雎」)

関関たる雎鳩 河の洲にあり 窈窕たる淑女 君子の好逑 参差たる荇菜 左右之に流る 窈窕たる淑女 寤寐之を求む

- (6) 床前明月光 疑是地上霜 举头望明月 低头思故乡 (李白『静夜思』)  
床前月光明らかなり 疑うらくは是れ地上の霜かと 頭を挙げて名月を望み 頭を垂れて故郷を思う

- (7) 故人西辞黄鹤楼 烟花三月下扬州 孤帆远影碧山尽 唯见长江天际流  
(李白『黄鹤楼送孟浩然之广陵』)

故人西のかた黄鹤楼を辞す 烟花三月揚州にくだる 孤帆の远影碧山に尽く 唯見る 江天の際に流るるを

<sup>4)</sup>《詩經》は四字一句のリズムで書かれている。

<sup>5)</sup>絶句や律詩は一句が五言か七言だが、五言一句 (2+3) や七言一句 (4+3) のリズムとともに四句と八句のリズムがある。その中には句の意味が対となり対のリズムとなっている場合もある。《三字經》は宋代 (960年~1279年) に編纂され、三字一句で書かれ380句ある。ここには三字一句、四句のリズムがある。

現代中国語のなかにも下記のような対比表現がよく現れる。対比することにより、あることが分かり易くなる。大別すると、1項目を2つに分け対比させて説明する方法（例8～12）、2項目を対比させながら説明する方法（例13～17）である。ここにも対のリズム（例9～12）が活かされている。まず前者を見てみよう。

- (8) 谢屋是个几千人的大村，面向平原，北靠山丘。（『人民』94-3-93）  
謝屋は、数千人の人が住む大きな村で、平野に面し、後ろに丘をひかえています。（同上、94-3-92）
- (9) 娃子有一多半住北岸，有一少半住南岸，南岸的娃子每天要几度涉水“北伐”。（『人民』94-7-93）  
子どもたちの半分以上は北岸の子で、南の子どもは半分より少なかった。彼らは「北伐」のため、毎日何度も川を渡らねばならなかった。（同上、94-7-92）
- (10) 学堂摆在河北岸的山坡上，山上有花有草，河里有鱼有虾，环境很优美。（『人民』94-7-93）  
教場が、川の北側の山の斜面にできた。山には花も草もあり、川には魚もエビもいる。すばらしい環境だった。（同上、94-7-92）
- (11) 阿浓怀念没有拖鞋的日子。阿浓也很欣赏有了拖鞋后的家。（『人民』94-1-93）  
阿濃は、スリッパがなかった日々をなつかしく思う。そして、スリッパを置くようになってからの家はすばらしい、とも思う。（同上）
- (12) 老王在下班的路上一见到卖西瓜的车或摊，就像棋迷见到棋盘、酒鬼见到酒铺一样，立刻焊在那儿，走不动道。（『人民』94-9-93）  
帰り道でスイカ売りの車や屋台が目に入ると、老王はつい立ち止まってしまう。将棋に熱中している男が将棋盤を見たとき、酒飲みが飲み屋を見かけたとき、その場にくぎづけになってしまうのと同じだ。（同上、94-9-92）

例(8)から(12)までは、1項目を2つに分け対比させて説明する方法である。これは次の3方法に分けられる。例(8)(9)(10)は同一項目を物理的な対比によって説明している。これが一番多い方法である。例(11)は同一項目“阿浓”を精神的な対比の面から説明している。例(12)は同一項目を2つの異なる譬えによって説明している。これらの対比による説明は前後が連続しているので、いずれも分かり易く、リズム感があり歓迎されている。

- (13) “燕三付”住在小城北街。无独有偶，在小城南街，皇甫宗仁挂牌行西医。（『人民』94-2-93）  
「燕三服」は、小城北に住んでいました。この世には常に対をなすものがありまして、小城南に皇甫宗仁という人が西医の看板を  
かかげていました。（同上、94-2-92）
- (14) 经过一扇一扇敞开的门，我到达了房间。又是意外，豁然灯光通明，  
荧屏又出现一个彩色的世界。走廊传来惊喜的声音，接着是“砰砰”  
的纷纷关闭房门的声音。我也关上了房门。（『人民』94-6-93）  
私は、開け放たれたドアの前を一つ一つ通って部屋に戻った。意外  
やそのとき、電灯がパッと灯り、テレビもまたカラフルな世界を映  
しだした。驚きと喜びの音が廊下から伝わってきた。そして、パタ  
ンパタンとドアを閉める音。私もドアを閉めた。（同上）
- (15) 吕星四处凑钱，翻修房子，申请执照，……三个月以后，吕星居饭馆  
开张了。从这天开始，他就不让父亲和妹妹到前堂来，逼着他们弄医  
学上的事。一年之后，吕月考上了医科大学。（『人民』94-10-97）  
呂星は、あちこちから金を工面して部屋を改造し、営業許可を申請  
し……三カ月後に星月居食堂が開店した。その日から父と妹が店に  
来るのを禁止し、医学の勉強に打ち込ませた。一年後、呂月は医科  
大学に合格した。（同上、94-10-96）
- (16) 警察一扭头，门缝有一上一下灼灼两对眼睛。“咦，怪，你叫什么好！”  
这是矮个子的声音。“我凭什么不能叫好？我刚才骂他臭，是恨铁不  
成钢。”高个子说。（『人民』94-4-93）

巡査が振り返って見ると、ドアのすきまから上下に二対の燃えるような目玉がのぞいていた。「オイ、変だな、いいぞツとはなんだ」と言ったのはチビだ。「いい、と言っちゃいけねえのか。さっきあいつをへボだと怒ったのは、うまくならねえのが情けなかったからだ」とノッポが言った。(同上、94-4-92~93)

- (17) 他们请到“燕三付”便捧他是再世扁鹊，小城医圣。再去求皇甫先生又捧其为当代华佗，小城一把神刀。(『人民』94-2-93)

彼らは「燕三服」に来てもらうと、「先生は、扁鹊の再来、この町の聖医であります」と持ち上げます。一方皇甫医師のところでは、当代の華佗、この町の神医でいらっしゃいます、と持ち上げます。

(同上、94-2-92)

例(13)から(17)までは、2項目を対比させて説明する方法である。対比による説明は、単独で説明するより、それぞれの特徴が明確になる。これも3方法に分けられる。例(13)(14)(15)は、2項目を別々に対比することによって説明している。これが一番多い方法である。例(16)は2項目を2つの対立する面から対比的に説明している。例(17)は2項目を2つの異なる譬えによって対比しながら説明している。いずれも分かり易い。ただし、このグループでは意味的な対比はあるが、対のリズムがなくなる。

### 3. 日本の「奇数」思想

筆者の大学のゲストハウスは104号室や204号室など「4」のつく部屋がない。これは日本人なら誰もが知っているように「4」が「死」と同音だからである。日本では極力「4」のつく番号を避ける。たとえば、病院やホテルなどの部屋や駐車場は「4」の番号を跳ばし「3」のあとは「5」になっている。現代の日本では「二」は二分できることから分かれる〈別れる〉、「四」は死、「六」はろくでなしを意味し、偶数はあまり好まれない。大きなレストランでは50卓あると、一般には第4卓と第44卓とがない。「4」は「死」に通じ縁起が悪いからである。

日本人は奇数が好きである。「一」は「トップ」で、物事の始まりを示す。「三」は「満つ、充つ」に音が通じ、縁起がいい。「三重奏」は大太鼓・小太鼓・横笛などの3種類の楽器で拍子をとることであり、すばらしい演奏になる。ことわざの中にも「三つ子の魂百まで」「三人寄れば文殊の知恵」「三度目の正直」「早起きは三文の徳」「石の上にも三年」などのようにプラスイメージの表現に「三」がよく使われている。ただし、「三日坊主」「三日天下」「女三人寄ればかしましい」のようにマイナスイメージの表現もある。「五」は「極楽(ごくらく)の[ご]」、「七」は「ラッキーセブン、七福」を意味し、一般にはどれも縁起がいい。

子どもの成長を祝って神社へお宮参りをする「七五三」の行事がある。これは子供の成長を祝う行事であり、男の子は三歳と五歳、女の子は七歳になると、正装をした両親が盛装をした子供を連れて神社へお礼参りに行く。昔は生活環境が悪く、子どもがよく夭折するので「七五三」になると、お祝いをしたと言われている。この行事は日本民族にとっては非常に大事であり、これを無視する親は、今でもいないであろう。また、結婚式の三々九度、応援団の三々七拍子や優勝した時の万歳三唱も「万歳」を三回する。

結婚式の祝儀も、2016年現在は一般に一万円か三万円か五万円かであり、偶数の二万円や四万円などは包まない。これは結婚式を挙げる二人が別れないようにという意味が込められている。お年玉も奇数である。今は一般的に小学生以下は千円、中学生は五千円、高校生は七千円、大学生は一万円である。餞別も奇数の金額、お葬式の際の香典も奇数の金額をつつむ。しかし、お年玉や餞別は、あげる対象が一人なので、今ではあまり数にこだわらなくなっている。特に餞別の習慣は多くの人がよく外国に行くので、学生時代の留学のとき以外は、ほとんどなくなってしまったと言える。

正月や小正月に神社へお参りするときは、賽銭箱へ「5円」「15円」を投げるのが主流である。「五」が奇数で縁起が良く、「5円」は「ご縁(いいご縁)」に通じ、「15円」は「十分にご縁」に通じる。「25円」や「45円」もよく投げられる。「25円」は「二重のご縁」、「45円」は「始終あるご縁」に

通じる。もちろん「150円」は「15円」の10倍だから奮発して投げる人は多い。金持ちは「1500円」「15000円」を投げるがめったにいない。それでも賽銭箱にたまに大札（千円札、一万円札）を見かけるので、験を担ぐ気前のいいヒトがいるのであろう。商売人に多いと聞いている。反対に「10円」は「遠縁」につながるので避けられる傾向にある。「100円」「1000円」も同様の考えで避けられてきたが、近年はそういう考えもなくなり、見ていると「100円」や「1000円」を投げる人も多い。

現代日本では数字文化にも例外がある。それは「八」と「九」である。日本人にとって、「八」は偶数だが、その形状が末広がりでおめでたいというので喜ばれる。「九」は奇数だが「苦」に音が通じるので好まれない。下宿やマンションなどはよく「四」と「九」のつく部屋番号は跳ばしてある。

日本の伝統的な節句は一月一日が元旦、三月三日が桃の節句、五月五日が端午の節句、七月七日が七夕、九月九日が菊の節句（「重陽節」とも言う。陰陽五行思想からくる陽数の「九」が重なる日。厄除けのため、山に登り、菊の花の入った酒を飲み、女性は腕に茱萸の入った袋を結び付ける）である。これらはいずれも中国から伝わった行事である。日本には今でもこれらを祝う伝統的な行事はあるが、このなかの九月九日の菊の節句はあまり祝われていない。三月三日の桃の節句、五月五日の端午の節句は前者が女の子を祝い、後者が男の子を祝うので、今でも各家庭で盛んに行われている。日本では、元旦でさえも昔ほどの賑わいがなくなってきたので、ほかの節句は言わずもがなである。ただし、現実の精神生活とかかわる子供の成長を祝う節句は、今でも重要視され盛んに行われている。

### 3.1. 日本の「非対称」（非対）表現

日本人が奇数を好む傾向にあるのは言葉の世界にも現れている。「三名山・三羽鳥・三人娘・御三家・七草粥・日本三景・三大温泉・三大名園・三大歌集」などの言葉は誰でも知っている。伝統があり今でも盛んに作られる俳句は五七五（松尾芭蕉：古池や蛙とびこむ水の音、正岡子規：柿食べば

鐘が鳴るなり法隆寺）であり、これらは瞬間の世界や静寂の世界を17文字による五七五のリズムに托している。短歌は五七五七七（阿倍仲麻呂：天の原 ぶりさけみれば 春日なる 三笠の山にいでし 月かも）であり、31文字の奇数によるリズム<sup>6)</sup>で一枚の美しい絵を描き故郷への思いを托している。川柳を作るのは、よくテレビ番組などでも取り上げられている。たとえば、サラリーマン川柳などの「上の二句」を紹介して、「下の句」を当てるクイズ番組などである。これは現代の社会生活を反映し、分かり易くておもしろいので、今でもかなり人気がある。俳句や川柳などは上手い下手をべつにすれば、日本人なら誰でもすぐ作れ、頭の体操ともなる。歴代のサラリーマン大賞のなかから幾つかを選んで以下に紹介する。川柳なのでやや被虐的な感じがする。

- ⑩ やせてやる!! コレ食べてから やせてやる!! (第8回)
- ⑪ 『ゴハンよ』と 呼ばれて行けば タマだった (第9回)
- ⑫ プロポーズ あの日にかえって ことわりたい (第13回)
- ⑬ 脳年齢 年金すでに もらえます (第20回)
- ⑭ 「空気読め!!」 それより部下の 気持ち読め (第21回)
- ⑮ 皮下脂肪 資源にできれば ノーベル賞 (第28回)

ちなみに、パソコンで見る第28回サラリーマン川柳大賞（2015年度）は401381句のなかから選ばれたそうである。第10位まで挙がっているがどの句もなかなか面白い。

#### 4. 数字文化の由来と現代

数字は生活をしていくうえで非常に重要である。具体的な数を表す数字は、どの国でも同じだが、数字文化となるとかなり違ってくる。中日両国は地理的には東アジアにあり、ともに黄色人種であるが、数字文化に対する考え方となるとかなり違っている。数字文化は中日文化の一つであり、中日両

<sup>6)</sup> 俳句や短歌の五七五や五七五七七のリズムは、五が[二・三]、七が[三・四]のリズムである場合が多い。現代では歌詞の中に活かされている。

国では好まれる数字と避けられる数字とがある。数字文化を理解することは、中日両民族の交流面で非常に重要である。

政治制度から見れば、現代中国は共産主義の国、現代日本は自由主義の国に属している。しかし、中国では生活の中に見られる文化、たとえば、年長者を尊敬する儒教思想および太極拳や少林寺拳法などの健康に役立つ運動を培う道教思想・仏教思想が根強く残っている。日本には神社とお寺がたくさんある。これらと関係するのは道教思想と仏教思想である。しかし、江戸時代までは儒教思想もかなり浸透していた。この三教が両国に及ぼした影響の違いはあるものの、これまでの長い歴史で精神的な影響を両民族に深く与えてきたことは否定できない。

中国の陰陽思想の核は“一分为二，合二为一。”[一が分かれ二となり、二が合して一となる。]である。混沌の大極“一”から一陰と一陽が生じ“二”となる。陰と陽は対称として存在し、どちらも欠くことのできない統一体である。この対称として存在する一陰と一陽が合して大極の“一”となる。かくして“一”は“二”をなし、“二”は“四”をなし、“四”は“八”をなし……と考えられ、偶数であって初めて対称となり、均衡と調和がとれ、欠くことのない円満・吉祥を意味する数字文化が生まれる。

古代にあっては、奇数も偶数も文献によく現れるので、中国でも日本でも奇数と偶数を共に重視していたようである。かくして、中日両民族は、陰陽に分かれる前の混沌としている大極の“一”を重んじ、陰と陽は対称として存在すると同時に統一体として存在すると考えていた。しかし、中国民族は古来、自然界の人間をはじめとする生命体と非生命体とが、それぞれ対称物として現実の世界に存在するので、大極のなかの一陰と一陽からなる“二”の対称を見て完全無欠と看做してきた。その代表が陰陽思想の二つの勾玉の紋であろう。日本民族は「一」と「二」は点と線を表すが、「三」は面であり調和や安定を表すと看做し、古来、非対称を重んじる傾向にあるようである。また、《老子》第42章に“道生一，一生二，二生三，三生万物。”[道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず。]とある。《老子》

の影響で、「三」から万物が生じると考え、奇数を重視していたようである。その代表が神社の三つの巴の紋であろう。これらは長い年月をかけて培われてきた伝統的な思想である。また、中国語には“木：樹木”と“林：樹林、森林”の二つの概念があり、日本語には[木][林][森]の三つの概念がある。遠近を示す指示詞も中国語では“这”と“那”であり、日本語では[これ][それ][あれ]である。この違いも対称の“二”と非対称の「三」の数字文化が生んだものであろう。これは自然環境から生まれた思想であるものの、その奥には精神文化がある。

現代の中日両国民は一部の人たちを除いて、道教を学ぶ一般人はほとんどいない。現代に生きる中国民族が偶数を好み、日本民族が奇数を好む傾向にあるのは、数字と同音にある単語の意味概念に起因しているのだろう。本来ならば、“四”が好きな中国民族も、その音が“死”に通じるので、今の若い人には以前ほど歓迎されていないようである。数字文化の根底には道教をはじめとする儒教・仏教の思想があるが、中日両国の現代人は同音による現代語の意味概念の吉凶も受け入れている、と言えるであろう。

中国と日本では数字の“二”“四”“六”“九”に対する考え方がかなり違うようだ。中国の“二”は二つで一对となり、片方だけでは不完全・不安定であり、どうしてももう一方を必要とする。「対」になると完全となり安定し、分割してはならない対となる。たとえば、そのことは成語のなかの“相依为命”[たがいに寄り添って生きる、互いに命の綱と頼む]や小説のなかの次の文に現れている。

- (18) 这时敏突然明白产生那种奇怪感觉的原因了：她拥有的太不平衡，物资富有，而精神太贫乏了。敏意识到这样下去是不会有真正幸福的。她一定要找到自己所没有的“另一半”，使自己拥有一个完整完美的世界。（『人民』95-4-99）

このとき突然、あの奇妙な感覚を生んだ原因が分かった。私の持っているものは全くバランスを欠いている、物質的には豊かだが、精神的には全く貧しいのだ。このままでは真の幸せはつかめない、と

敏は悟った。私に欠けている「もう一つの半分」を探し出し、完璧な世界をわが物にすることが絶対必要だ、と思った。

(同上、95-4-98~99)

例(18)の“敏”の考え方は、一人だけではバランスにかけ、二人が結婚してこそ、完璧な世界が作れるとする「対の思想」の表れである。

中国の“四”は自然を形成する上掲の“东南西北”“春夏秋冬”が基本であり、一つでも欠けたら完璧ではなく、一つ一つが非常に大事であり絶対に欠かせないものである。四つそろってこそ完璧であり円満なのである。“六”は“流畅、流利”の意味、特に「物事が順調に行く」「コトがスムーズに運ぶ」の意味で喜ばれている。“九”は“久”に音が通じ、“永久、永遠”「永久、永遠」の意味であり、非常に喜ばれる。これに対し、日本の「二」「四」「六」「九」は、「二分／分割する・別れるの「二」」「死」「ろくでなしの「ろく」」「苦」と同音なので避けられている。このほかにも日本語では偶数の入っている「二枚舌」「表六玉」「総領の甚六」などは、いい意味では使われない。

“一”と“八”は中日両国でどちらも歓迎されている。“一”は物事の始まりであり一番を意味し、これは中日両国に共通する。“八”は広東語の“发财”「儲かる、繁盛する」の“发”に音がよく似ているからであり、日本語は形状から「末広がり」の意味を表し縁起がいい。

中国と日本とでは数字文化が異なる。一般には、中国民族は偶数を好み、日本民族は奇数を好む傾向にある。場合によっては、“二”“四”“六”“九”のように反対の意味を表す数字文化の概念もある。お互いの数字文化を知ることにより、中日両国の文化理解を深め、誤解や衝突を避ける一端となれば、その意義は大きい。

## 5. おわりに

数字はごくありふれた基本的な生活面で非常に重要である。買い物などの具体的な数字は特に重要である。この具体的な意味を表す数字を基礎にして、自然環境をもとにした『老子』などの思想により、中日両国の数字文化

が長い年月をかけて形成された。一般的に言えば、中国民族は偶数を好み、日本民族は奇数を好む傾向にあるが、“一”と“八”だけは両民族とも好んでいる。

中国民族が偶数を好む理由は「対」からなる自然環境に由来し、日本民族が奇数を好む理由も「三」からなる自然環境に由来している。これを理論づけたのが陰陽思想である。そのため数字文化の根底には陰陽思想があるが、道観を表す勾玉マークは丸のなかに陰陽の2つがあり、神社のマークは丸のなかに勾玉とよく似た巴のマークが3つある（日本の神社は一般には3つだが、ごくまれに1つまたは2つの場合もある）。このことから中国民族の根底には“二”があり、日本民族の根底には「三」のあることがうかがえる。どちらも自然環境が基盤となっているが、精神文化に支えられている。今では現代人の数に対する音“四”の概念がかなり重要な位置を占めてきて、中日両国における現代の数字文化にはやや変化も見られる、と言える。

中日両国の数字に対する文化は、偶数は対となって調和や安定をもたらすという中国民族に対して、偶数は2つに割れるので、両者は「わかれ」を意味し、縁起が悪いとする日本の文化がある。奇数は何かが欠けているので不完全であると考え中国民族に対し、奇数は割り切れないので縁起が良いとする日本の文化がある。中日両民族では数字文化が異なるが、これらはともに精神文化に支えられた自然環境から生まれた文化概念なので、双方がそれぞれの文化を理解することが肝要である。

この中日両民族の精神文化に支えられた自然環境に由来する数字文化から、両国民の好むリズムが生まれる。中国民族には「四字一句」や「対」を好む傾向が生まれ、さらに四字一句のリズムや対のリズムが生まれる。対のリズムからは絶句や律詩などの定型詩が生まれ、そのリズムも生まれる。日本民族は「非対」を好む傾向から、俳句・短歌・川柳などの五七五を基本とするリズムが生まれる。これらの数字文化やリズムは、今でも自然環境を重視する中日両民族の言語のなかに活かされているばかりではなく、生き生きとして活躍している。

【言語資料】

- 1) 『人民中国』 ショートショート 人民中国雑誌社 1988～1997
- 2) 『中国語学講読シリーズ』 ①～⑥ 北京外文出版社 1991
- 3) 《汉语常用词用法词典》 李晓琪等編 北京大学出版社 1997
- 4) 『「千字文」物語』 姜晓东著 吉田泰謙译 华语教学出版社 2013
- 5) 『「三字経」物語』 郁輝著 小松嵐译 华语教学出版社 2013
- 6) 『「百家性」物語』 毕艳莉著 小松嵐译 华语教学出版社 2013
- 7) 『「幼学瓊林」物語』 张梅著 吴小瑾 高橋真理子译 2013

【参考文献】

- 綾部武彦 栗原千里 王亜新 橋本幸枝 (2000) 『実用中国語成語 1000』 光生館
- 池田知久 編訳 (2012) 『訳注「淮南子」』 講談社
- 飯塚朗 (1982) 『故事遍歴』 時事通信社
- 和泉新 佐藤保 (1992) 『中国故事成語大辞典』 東京堂出版
- 汪玉林 (2002) 「中国語の中の数字文化」 『明海日本語』 第7号 (ネット)
- 落合敦思 (2014) 『漢字のなりたち「説文解字」から最先端の研究まで』 筑摩書房
- 金丸邦三 孫玄齡 (2006) 『中国語ことわざ用法辞典』 大学書林
- 栗田直躬 (1996) 『中国思想における自然と人間』 岩波書店
- 香坂順一 羅小東 (2000) 『おぼえておきたい中国語成語 300』 光生館
- 唐向紅 鷲尾紀吉 『中国と日本の数字文化における比較研究』 (ネット)
- 張姪娜 (2010) 「数字から見た日中文化の特色」 『明海大学短期大学紀要』 第44号 (ネット)
- 張健主編 (2004) 『解説朱自清經典』 花山文芸出版社
- 陳福臨 (2005) 『中国語しゃれ言葉と縁起言葉』 白帝社
- 西山豊 (2014) 『奇数の文化と偶数の文化』 大阪経済大学情報社会学部 (ネット)
- 蜂屋邦夫 (1996) 『中国思想とは何だろうか』 河出書房新社
- 蜂屋邦夫 (2008) 『老子』 岩波新書
- 松本雅明 (1973) 『中国古代における自然思想の展開』 中央公論事業出版
- 林翠芳 「中国語と日本語の数字に見る文化的要素に関する一考察」 『高知大学留学生教育』 第7号 (ネット)